

『企業買収とSRI』

安藤 正行(SIF-Japan 運営委員、株式会社クレアン)

vol.37

ニッポン放送、北越製紙、サッポロビール……。一連の金融規制の緩和と政策、新会社法の施行等を受けて、企業買収、買収防衛策などのニュースを目にする機会が増えた。また、ちょうど先日まで NHK で「ハゲタカ」というドラマをやっていたので見た人も多いかもしれない。これらを見てあらためて感じるのは、私たちが暮らすこの世界を、根っこのところでは間違いなく「資本の論理」が支配している、ということだ。

このような時代にはあらためて「会社はだれのものか」と問いたくなる。もちろん実質的、経済的所有者は株主なのだろう。しかしそこで働く経営者や従業員たちにとって会社はその多くの時間を費やす人生の舞台でもある。

そして彼らには家庭があり家族もいる。資本の論理、つまり「カネ」の論理だけでは割り切れない、確かな「現実」がそこにはあるのだ。そしてだからこそ、その「カネ」を融通する金融機関には格別の責任がある。その「カネ」はある人々の人生を奪ってしまうかもしれない力を持っているのだから。

企業買収における「SRI」とは何なのだろうか。

甘っちょろい考えと言われるかもしれないが、そこで発生する儲けや合理化だけを目的にするのではなく、その企業の社会における存在意義を尊び、そこで働く人々の誇りを大切にすることを企業買収であってほしい。ドラマが描いていた結末のように……。

